

老年看護学実習における 介護老人保健施設実習での学生の学び

STUDENTS' LEARNING THROUGH HEALTH CARE FACILITY FOR THE ELDERLY IN GERONTOLOGICAL NURSING PRACTICUM

桑田 恵美子 ・ 菅原 尚美 ・ 山本 和江

Emiko KUWATA Naomi SUGAWARA Kazue YAMAMOTO

キーワード：介護老人保健施設実習 学生の学び 老年看護学実習

Key words : health care facility for the elderly, students' learning, gerontological nursing practicum

要 旨

本調査の目的は介護老人保健施設実習での学生の実習記録を分析することで、施設実習での学びを明らかにすることを通して、その学習効果を検証することである。方法は老年看護学実習で施設実習に行った本学看護学科3年生93名の実習記録用紙及び「学びのレポート（3日間）」を質的記述的調査方法にもとづいて分析し学びを検証した。結果、学びの内容から211データを抽出し、37『サブカテゴリー』から、【施設の高齢者と職員を守る災害対策】【高齢者と家族のニーズを叶える支援】【高齢者の健康保持のための支援】【穏やかな死への支援】【穏やかな暮らしを支える支援】【認知症その人が穏やかに生活できる支援】【元気の出る通所リハビリ】【住み慣れた地域の中の老人保健施設】【医療・介護の切れ目のない支援】の9カテゴリーを生成した。学生は実習を通して高齢者とその家族が望む生活に近づけるための支援方法を学んでいた。

緒 言

日本の人口の高齢化は著しく、厚生労働省の報告では65歳以上の高齢者数は、2025年には3,657万人（30.3%）となり、2042年にはピークを迎えると予測している。また、75歳以上高齢者の全人口に占める割合は増加していき、2055年には25%を超える見込みである。このような人口の高齢化を背景に要介護高齢者や認知症高齢者への介護の問題が課題となり、高齢者やその家族がその健康状態や生活能力に応じて、介護保険や医療保険を活用しながら医療提供施設や介護保険施設、在宅など高齢者の療養生活の場は多様化している¹⁾。高齢者が多様化している療養生活の場でどのように生活することが適切なのか、その人の生き方に沿った生活が確保できるように高齢者とその家族を支援していくことが重要となる。

本学看護学科では、2015年教育目標の内容を踏まえつつ、教養教育科目と専門教育科目の両区分を見直し、特に専門教育科目においては、「学生の主体的な学びの促進」「クリティカルシンキングや問題解決力の育成」「効果的な実習展開」を変更方針の重点に掲げ、新設科目の配置、学生の看護実践力を強化して、教育内容の充実を図るため、カリキュラム変更を行った。その変更に伴い2017年より老年看護学領域では老年看護学実習を、様々な健康段階にある高齢者を対象に医療と福祉の連携と実際、および老年看護について実践から学ぶことを目的とした。老年看護学実習3単位を3年次の科目として、病院実習2単位、介護老人保健施設実習1単位とした。医療と福祉の連携の実際を学ぶことができるように位置づけた。

高齢者の療養生活の場である介護老人保健施設（以下施設）は「総合的ケアサービス施設」「家庭復帰施設」「在宅ケア支援施設」「地域に開かれた施設」の4つ機能がある²⁾。また施設では生活者である一人ひとりの高齢者が主役であり、その人の主体性や意思を尊重しニーズを満たすために、同じ方針のもとにそれぞれの専門職が専門性を発揮してチームケアにあたることが求められる³⁾。

介護老人保健施設実習（以下施設実習）では、施設の機能や専門性を発揮したチームケアについて学習する機会となる。

先行研究において施設での実習は、医療提供施設とは異なり、施設ケアの特徴や、介護保険サービスにより提供されるケアや施設での連携に関する特徴、維持期リハビリテーション実践の技術、ヘルスアセスメントに求められる技術を学ぶことができた。また高齢者の理解、高齢者観の発展につながっていたと報告している^{4) 5)}。施設での実習を通して生活の場を重視した看護学実習の重要性が確認されており、施設実習の意義は大きい。

本学看護学科のカリキュラム変更後2年を経過したが、老年看護学実習における施設実習での学習効果を明らかにしていない。施設実習での学びを明らかにすることは、その学習効果を可視化し検証することにつながり、今後の教育方法の検討にもつながる。

I. 調査目的

施設実習で学生がどのような学びしているか実習記録を分析することで、施設実習での学びを明らかにすることを通して、その学習効果を検証することを目的とする。

II. 介護老人保健施設実習の概要

1) 施設実習の目的

施設で療養生活を送る高齢者とその家族がもつ健康問題を理解するとともに望む生活に近づけるための支援を学ぶ。

2) 施設実習目標と行動目標

- (1) 施設の目的・理念、機能、構造、事業概要、災害時の対応が理解できる。
- (2) 施設で療養生活を送る高齢者の健康面を身体、精神、社会的側面から理解できる。
 - ①施設で療養生活を送る高齢者の身体、精神、社会的側面の変化が、その人らしく生活するための暮らしにどのように影響しているかわかる。
 - ②高齢者や家族が望んでいる生活を叶えるた

めにどのようなケアプランが立てられているのかわかる。

(3) 施設における療養生活の場に必要看護が理解できる。

①複数疾患、非定型的症状、訴えの少ない高齢者の日常の健康管理方法や医療処置・緊急時の対応がわかる。

②療養生活の場での高齢者の看取りと家族への支援がわかる。

③療養生活の場での認知症高齢者の特徴を踏まえた支援がわかる。

(4) 施設における関連職種の役割、協働・連携について理解できる。

①高齢者や家族が望んでいる生活を叶えるため施設のどのような関連職種が協働・連携（サービス担当者会議・モニタリング・評価）しているのかわかる。

(5) 施設における家族や地域の関係者との協働・連携について理解できる。

①高齢者・家族にとって施設を利用している目的がわかる。

②施設の入所目的と合わせ、家族が療養生活の場へ参加しどのような役割を果たしているのかわかる。

③高齢者が地域とつながりを実感できるインフォーマルな地域関係者との協働・連携がわかる。

3) 施設実習の展開内容

施設実習はA施設1箇所で行った。1回に5名から12名の学生が実習を行った。施設のオリエンテーションは、4月の実習開始前に講義形式で90分、施設師長より学内で受けた。内容は施設の役割、概要、看護師の役割、在宅復帰支援、看取り支援などであった。1回の実習期間は3日で、見学実習とした。施設入所の高齢者1名を2～3人の学生が受け持ち、ケアの見学やコミュニケーション、ケアプラン閲覧を2日間行った。また通所リハビリは1日とし家庭からの連絡帳の閲覧、健康チェックの見学、コミュニケーション、レクリエーションの参加などを行った。サービス担当者会議、判定会議に参加し、多職種連携や認知症ケアの実際を学んだ。臨地講義は施設の多職種連携・ケアプラン、認知症・災害対策・虐待、地域とのつながりについて、30分～40分程度実施した。学生の記録は概ね1枚（A3用紙）に①見学・実施項目、②見学・実施内容（入所者・利用者の言動や表情、ケア、レクリエーション、スタッフの関わり、多職種連携など）、③考察（入所者・利用者の反応から考えたこと、気づき、学びなど）の3つの視点で学びを整理させた。実習最終日は施設の看護職員が参加して合同カンファレンスを行い、3日間の学びを目標に照らしてまとめた記録をもとに、発表・討議をした。実習内容は表1に示した。

表1. 施設実習の内容

	内 容
実習1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション、施設内見学 *受持ち実習2日間 ・受持ち入所者の紹介、挨拶 ・受持ち入所者のケアの見学（入浴、食事、レクほか） ・情報収集（ケアプランの閲覧）、コミュニケーション ・サービス担当者会議（多職種連携）参加 ・臨地講義（多職種連携・ケアプラン）
実習2日目	<ul style="list-style-type: none"> ・受持ち入所者のケアの見学（入浴、食事、レクほか） ・情報収集（ケアプランの閲覧）、コミュニケーション ・判定会議（多職種連携）参加 ・臨地講義（認知症・災害対策・虐待防止） ・臨地講義（地域との連携）
実習3日目	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション、通所リハビリの見学 *通所リハビリ実習1日 ・ケアの見学（入浴、食事、レクほか） ・ケアプラン、連絡帳の閲覧、コミュニケーション ・学生合同カンファレンス

Ⅲ. 方 法

1. 対象

平成30年5月～11月に老年看護学実習で施設実習に行った本学看護学科3年生93名の実習記録及び学びのレポート（3日間）を対象とした。

2. 分析方法

提出された実習記録用紙及び学びのレポート（3日間）を質的記述的研究方法⁶⁾にもとづき分析した。「施設での高齢者や施設の職員との関わりを通しての学生の学び」の部分抽出し、文脈ごと・類似性・規則性、特殊性がみられるとき質的データを意味のまとまりごと見分けて分類し「データ」とした。「データ」から全体の感覚をつかみ、それらを適切な長さに区切り、何度も読みそこにある学生の学び“施設での高齢者や施設の職員との関わりを通して学生はどのような学びをしたのか”を発見した。抽象度を上げて『サブカテゴリー』から【カテゴリー】とした。その意味の解釈が妥当かどうかデータに戻って継続的に比較検討した。また抽出された【カテゴリー】から施設実習目標の到達度を分析し学生の学びを検証した。

施設実習後の学生の記録用紙を使用するにあたり、学生に実習評価終了後に使用目的と個人が特定されないことを口頭で説明して全員より同意を得た。また学生の学びの内容をまとめることで、今後の指導に生かすことを説明した。

Ⅳ. 結 果

施設実習を通して学生が捉えた学びの内容から211データを抽出した。37『サブカテゴリー』、9【カテゴリー】を生成した。以下【カテゴリー】ごとに述べる。

1. 【施設の高齢者と職員を守る災害対策】カテゴリー

【施設の高齢者と職員を守る災害対策】とは、災害時の高齢者と職員を守る対策について学んだ内容であった。『高齢者を守る災害対策』『職員を守る災害対策』『普段より地域と連携し災害対策』の3サブカテゴリーが抽出された。表2に示した。

『高齢者を守る災害対策』は6データから構成されていた。具体例は「災害時は正しい情報をスタッフで確認して多くの命を守るために行動している」ことを学んでいた。『職員を守る災害対策』は1データから構成されていた。具体例は「災害時はスタッフも命を守ることが大切である」ことを学んでいた。『普段より地域と連携し災害対策』は1データから構成されていた。具体例は「震災時、食事の配給が地域からあり、普段より地域との連携は重要」を学んでいた。臨地講義で東日本大震災での施設の経験を踏まえながら、行われている対策について学んだ内容であった。

2. 【高齢者と家族のニーズを叶える支援】カテゴリー

【高齢者と家族のニーズを叶える支援】とは、

表2. 【施設の高齢者と職員を守る災害対策の理解】カテゴリー

サブカテゴリー	データ
高齢者を守る災害対策	災害時は正しい情報をスタッフで確認して多くの命を守るために行動している
	災害レベルに合わせた避難場所の確保
	災害は常に準備しておかなければならない
	利用者側にいて不安な思いに寄り添う
	災害時はスタッフの目の届く位置に高齢者を置くことが大切である
	災害時は落ち着いた行動で利用者の気持ちを考えることを忘れない
職員を守る災害対策	災害時はスタッフも命を守ることが大切である
普段より地域と連携し災害対策	震災時、食事の配給が地域からあり、普段より地域との連携は重要

施設が高齢者と家族のニーズに沿ったケアプランを立案し、多職種で協働して支援していることを学んだ内容であった。『ニーズを叶えるケアプランに沿った支援』『多職種で叶える高齢者や家族のニーズ』『家族との情報共有』の3サブカテゴリーが抽出された。表3に示した。

『ニーズを叶えるケアプランに沿った支援』は8データから構成されていた。具体例は、ケアプランはその人らしさを踏まえその人にあった計画・実施が必要」であることを学んでいった。ケアプランについての臨地講義や、ケアプランの実際を見学して学んだ内容であった。『多職種で叶える高齢者や家族のニーズ』は7データから構成されていた。具体例は「多職種での情報共有は本人や家族のニーズを叶えるために適したものになっていた」があった。サービス担当者会議の見学やケアプランの実際を見学して学んだ内容であった。

多職種でかかわるためお互いの職種の役割や専門分野で関わり、チームで行うことの大切さを学んでいた。『家族との情報共有』は、2データから構成されていた。具体例は「連絡帳で家庭から施設と、継続した支援ができる」があった。これは通所リハビリで使用している家庭と施設の情報交換の記録用紙であるが、家庭と施設の情報共有が家族の安心につながることを学んでいた。

3. 【高齢者の健康保持のための支援】カテゴリー

【高齢者の健康保持のための支援】とは、施設が高齢者の健康保持のため看護師だけでなく、多職種で支援していると理解した内容である。『高齢者の健康管理を支える役割』『家庭での生活をイメージした生活指導』『楽しみながら継続できる機能訓練』『飲水の機会を増やし脱水予防』『転倒予防』『多職種と情報共有し健康管理』の6サブカテゴリーが抽出された。表4に示した。

表3. 【高齢者と家族のニーズを叶える支援の理解】カテゴリー

サブカテゴリー	データ
ニーズを叶える ケアプランに沿った支援	ケアプランに基づいて支援がなされている
	ケアプランの作成と管理は介護支援専門員の役割
	ケアプランはその人らしさを踏まえその人に合った計画・実施が必要
	本人や家族意向を踏まえたニーズを叶えるため、目標やサービス内容が立案
	その人が必要な情報やサービスが何か考え、ニーズに応じていくことが大切
	ケアプランの中心は本人
	判定会議は退所か継続だけでなく、利用目的に沿った評価も重要視されていた。
	ケアプランは必要時修正される
多職種で叶える 高齢者や家族のニーズ	多職種での情報共有は本人や家族のニーズを叶えるために適したものになっていた
	多職種でかかわるためにはお互いの職種の役割を理解することが大切
	様々な職種が専門分野で関わりチームで動いている
	多職種で利用者の能力に応じた自立した日常生活が営める復帰をめざす
	サービス担当者会議で利用者に適した支援提供の検討
	本人や家族にサービス担当者会議に参加してもらうことで本人の意向を取り入れることができる
	施設は独居の要介護者と家族負担を軽減
家族との情報共有	連絡帳で家庭から施設と、継続した支援ができる
	連絡帳で施設の状況やアドバイスを家族に伝達

表4. 【高齢者の健康保持のための支援】カテゴリー

サブカテゴリー	データ
高齢者の健康管理を支える役割	看護師は状態維持のための健康管理
	看護師の少ない人数で体調管理
	看護師はさまざまな疾患に対応した知識・技術が必要
	医療的ケアも行っていることを知った
	緊急時は家族に連絡，協力病院受診している
	本人確認で誤薬予防をして内服管理
	いつもと違う様子や変化を見逃さない
	良い状態にして在宅に返すことが重要
	認知症の人は体調の変化の訴えが乏しいので変化を逃さない
	入浴前にバイタルサインの測定
	常に周囲の状況をみて行動することが必要
認知機能の低下している人には確実な内服ができていないか確認していた	
家庭での生活をイメージした生活指導	看護師は生活全般を整える役割
	療養より生活を重視してケアしている
	自宅に帰ってからの状況を考える
	在宅で薬の飲み忘れがない方法の検討
	家庭に帰るために必要な内容を考え支援する
楽しみながら継続できる機能訓練	楽しみながらリハビリを行うことは，継続につながる
	楽しみながら機能の維持をさせる関わりが大切
	レクリエーションは楽しみながら体を動かし身体機能を高める
飲水の機会を増やし脱水予防	水分がいつでもすぐ飲める環境になっている
	水分の種類（冷たい番茶，温かい番茶，水など）を多くし飲水してもらう工夫
転倒予防	転倒予防のための部屋の構造や配置
	浴室は転倒が起きやすいので注意
	転倒は高齢者のADLやQOLに大きな影響を及ぼすため予防が重要
	必要最小限にセンサーマット使用
	遠慮・気兼ねに配慮した転倒予防
	リハビリを通して筋力低下を予防し，転倒予防
	転倒しないように注意を促す
多職種と情報共有し健康管理	入浴時，全身の状態を観察
	多職種での情報共有は変化を見逃さないことにつながる

『高齢者の健康管理を支える役割』は12データから構成されていた。具体例は「多職種での情報共有は変化を見逃さないことにつながる」があった。看護師が中心になりながら、看護師だけでなく多職種で情報共有し高齢者のいつもと違う様子や変化を見逃さない観察が重要であることを学んでいた。『家庭での生活をイメージした生活指導』は5データから構成されていた。具体例は「家庭に帰るために必要な内容を考え支援する」があった。施設は在宅復帰を目指す通過施設のため、家庭での生活に必要な支援を普段の生活の中にとり入れて指導していることを学んでいた。『楽しみながら継続できる機能訓練』は3データから構成されていた。具体例は「楽しみながらリハビリを行うことは、継続につながる」があった。学生は高齢者とともに機能訓練に参加して、集団での訓練やレクリエーションを高齢者が楽しみながらできるように行っていることを学んだ内容だった。『飲水の機会を増やし脱水予防』は2データから構成されていた。具体例は「水分の種類（冷たい番茶、温かい番茶、水など）を多くし飲水してもらう工夫」があった。高齢者の脱水予防は重要であり、施設で工夫をして飲水の機会を多くしていることから脱水予防の重要性を改めて学んでいた。『転倒予防』は7データから構成されていた。具体例は「遠慮・気兼ねに配慮した転倒予防」があった。高齢者が遠慮・気兼ねして一人で行動し転倒しないような言葉かけや配慮、安全な環境をつくっていることを職員の説明から学んでいた。『多職種と情報共有し健康管理』は2データから構成されていた。具体例は「多職種での情報共有は変化を見逃さないことにつながる」があった。施設は生活の場であり、高齢者に様々な職種が関わり観察しているため、情報共有は高齢者の健康管理上重要であることを学んでいた。

4. 【穏やかな死への支援】 カテゴリー

【穏やかな死への支援】とは、高齢者が最後までその人らしく生きて死を迎えることができるように、高齢者と家族の希望を叶える支援について理解した内容である。『高齢者・家族の希望を叶

える看取り』『家族の心に寄り添う看取り』『死に向かう高齢者の家族への予期的指導』『普段と変わらない生活の中での看取り』『多職種で支えるその人らしい看取り』の5サブカテゴリーが抽出された。表5に示した。

『高齢者・家族の希望を叶える看取り』は9データから構成されていた。具体例は「これまでのその人の歩みを知り、関わっていくことが大切」があった。職員より実際の看取り場面の説明を受けながら学生は、これまで生きてきたその人と家族の生活史を知り一人の人としてその人の看取りに立ち会い、その人・家族の希望を叶える看取りをすることの大切さを学んでいた。『家族の心に寄り添う看取り』は6データから構成されていた。具体例は「家族の揺れ動く気持ちを理解し、心に寄り添う関わり」があった。看取り時の家族の心理に配慮した関わりが大切であることを学んでいた。『死に向かう高齢者の家族への予期的指導』は1データから構成されていた。具体例は「死に向かう過程で現れる症状を家族に説明し心の準備をしてもらう」があった。高齢者の死が間近に迫り、死に向かう過程を家族に説明することも不安を緩和する上で大切であることを学んでいた。『普段と変わらない生活の中での看取り』は1データから構成されていた。具体例は「苦痛が少なく周りの人と同じ生活の中での看取り支援」があった。高齢者の苦痛が緩和され、普段の生活とは変わらない日々の生活の中で、高齢者の尊厳が保持され、看取りが行われている内容である。『多職種で支えるその人らしい看取り』は2データから構成されていた。具体例は「その人らしい最後を迎えるためには多職種でのカンファレンスが重要」があった。看取り支援もその人らしい看取りができるようにケアプランの中で、多職種で支援されている。

5. 【穏やかな暮らしを支える】 カテゴリー

【穏やかな暮らしを支える】は、高齢者の精神状態が安定し、自分らしく暮らすことができるよう支援することであり、学生が施設実習を通して理解した内容である。『おいしく食べられる食事

表5. 【穏やかな死への支援】 カテゴリー

サブカテゴリー	データ
高齢者・家族の希望を叶える看取り	本人の希望を叶え、家族に関わってもらうことは本人・家族の満足いく看取りにつながる
	一人の人間として死に向き合いながら看護師としての役割を果たす
	これまでのその人の歩みを知り、関わっていくことが大切
	個室を整え環境を整備する
	本人・家族の意向に沿った急変時の対応
	疼痛コントロール、褥瘡予防、食事摂取への援助の看取りケア
	一人ひとりの死が次の方に生かせることは必ずあり、カンファレンスを行うことは重要
	本人・家族の満足いく看取りは、スタッフの満足にもつながる
家族の心に寄り添う看取り	看取り時、家族の心に寄り添い、気持ちの整理がつくまで待つ関わりが大切
	家族の揺れ動く気持ちを理解し、心に寄り添う関わり
	看取り時、家庭であればどうかを考えた関わりが大切
	看取り時、家族が立ち会えるようにする
	看取り時、家族が納得できる決断をすることが、家族の満足につながる
	死亡後、家族に手紙を送ることは家族の喜びにつながる
死に向かう高齢者の家族への予期的指導	死に向かう過程で現れる症状を家族に説明し心の準備をしてもらう
普段と変わらない生活の中での看取り	苦痛が少なく周りの人と同じ生活の中での看取り支援
多職種で支えるその人らしい看取り	その人らしい最後を迎えるためには多職種でのカンファレンスが重要
	看取りに関わったスタッフのグリーフケアも大切

への支援』『高齢者その人、その人に合わせた対応』『楽しめる環境づくり』『高齢者の体験を大切に聴く』『つらい体験に配慮した関わり』『高齢者の尊厳を支える』の6サブカテゴリーが抽出された。表6に示した。

『おいしく食べられることへの支援』は9データから構成されていた。具体例は「多くの人と食べることで意欲が湧き、おいしく食べることができる」があった。高齢者がおいしく食事を食べられるように、食事に伴う誤嚥予防や食欲が湧くような工夫がされていることを学んでいた。『高齢者その人、その人に合わせた対応』は16データから構成されていた。具体例は「ペットなどに会えない寂しさを緩和する写真・動画の鑑賞」があっ

た。高齢者のニーズは異なり、その人に合わせた個別な対応がその人らしい生活を支援することにつながることを学んでいた。『楽しめる環境づくり』は21データから構成されていた。具体例は「笑顔の写真は、日常を楽しくできている瞬間である」があった。高齢者は生活環境が変化することで大きなストレスを感じやすいため、自宅に近い環境を提供し季節感を取り入れた行事や交流して楽しく過ごせる工夫、高齢者が楽しめる工夫をしていることを学んでいた。『高齢者の体験を大切に聴く』は10データから構成されていた。具体例は「その人にとって大切な充実した思い出」があった。学生は高齢者との会話を通して、生活史や人生を知り、表情が生き生きと変化しているこ

表6. 【穏やかな暮らしを支える】カテゴリー

サブカテゴリー	データ
おいしく食べられることへの支援	食事がおいしく食べられる工夫
	全員での嚥下体操は誤嚥予防につながる
	食べやすくし、十分栄養が取れるようにすることは重要だ
	多くの人と食べることで意欲が湧き、おいしく食べることができる
	食事に対する希望が多く、食べることは重要
	食べたいと思う食事を提供
	口腔内を清潔にすることで食の楽しさを感じる
	視覚から食欲が湧く工夫も必要
	食事による危険がない
高齢者その人、その人に合わせた対応	その人にあった入浴方法の選択と負担の軽減
	その人の残存機能を活かした関わり
	最近の社会情勢に目を向けた会話はコミュニケーションがスムーズ
	その人の立場で考えることがより良い支援につながる
	ケアチェック表は必要なケアチェックだけでなく、その変化まで確認するようになっていた
	その人が納得して取り組んでもらえる声掛けが大切
	一人の人間として関わるために相手を理解することが大切
	高齢者のニーズは様々でそのゴールも異なる
	施設には、一人一人に合った生活の多様さがある
	尊重する態度で、温かく接する
	その人にあったコミュニケーションの工夫
	ペットなどに会えない寂しさを緩和する写真・動画の鑑賞
	孫との関わりが生きがいになっている
仕事の話はする人が多い	
その人のペースに合わせた対応	
その人の不安に寄り添う	
楽しめる環境づくり	明るく楽しい環境
	やりたいことができる環境
	生活環境が変化することは大きなストレスであるため入所前の生活に近づける努力
	壁に絵を貼ったり、花を飾ったりできる自分の好む環境
	一人ひとりが生活しやすい環境を整える
	施設の型にはめない個人を尊重した生活
	好きな時間を過ごしてもらう
	自宅で使用していた本人が大切にしているものを身近に置くことで安心する
	家族が面会に来て、高齢者との関係が途切れない
一緒に行くこともコミュニケーションをとる上で大切	

サブカテゴリー	データ
楽しめる環境づくり	人と交流して楽しく過ごしたいニーズがある
	季節に合わせた行事の工夫
	誰かとい時間の良い刺激になる
	好きな服を着たり，化粧をする
	高齢者が楽しめる工夫
	笑顔の写真は，日常を楽しくできている瞬間である
	家族が会いに来てくれることを楽しみにしている
	会話により笑顔が増える関わり
	スタッフの笑顔や明るい声掛けが利用者の笑顔につながる
	利用者が楽しく過ごせるように多職種で検討
	家族が食事や入浴に参加することは，本人にとって安心につながる
高齢者の体験を大切に聴く	多くの体験談を伝えようとしてくれていた
	その人が自分の経験を話すとき，表情が生き生きしている
	高齢者の人生の中の経験は意味ある経験として，その人の中に統合されている
	最近のことは覚えていなくとも，昔のことは鮮明に覚えていることは高齢者の特徴
	生活歴や時代背景が今の生活につながっている
	健康状態の悪化，運動機能の低下，家族から離れる等精神面に影響して悲観的に考える傾向がある
	体験を聴くことはその人の人生の一部を聴くこと
	過去の体験の語りは，高齢者を笑顔にする
	その人にとって大切な充実した思い出
家族や孫の話が合いに来てくれる話を楽しそうに話してくれていた	
つらい体験に配慮した関わり	戦争のつらい体験の語りは，若者への期待と考えた
	高齢者は自分がしたいことを我慢している
	人生の中の良い経験，辛い経験を語る笑顔の裏側に，悲しみがある
	家族に迷惑をかけたくない思いを抱えている
	全て人が納得して施設に入っているわけではない
	家族になかなか会えない思いへの配慮
	過去の震災の思い出に配慮した関わり
高齢者の尊厳を支える	利用者が納得いく説明
	最後までその人の尊厳を保つ関わりが大切
	拘束しない対応は人権を尊重している
	サービス担当者会議はその人の意志を尊重したケアの提供になる
	一人の人として尊重する
	成功体験はその人の自信につながる
	同じレベルの集団でリハビリをすることは，頑張り，自信につながる
	自信につながる関わり

とに気づくことができていた。『つらい体験に配慮した関わり』は7データから構成されていた。具体例は「過去の震災の思い出に配慮した関わり」があった。高齢者の生活史や人生を理解することは、必ずしも楽しいことだけでなく、触れられにくいつらい経験もあることを理解して関わるのが大切であると学んでいた。『高齢者の尊厳を支える』は8データから構成されていた。具体例は「利用者が納得いく説明」があった。意思ある一人の人格として意思決定できる説明や高齢者を

尊重した対応が大切であることを学んでいた。

6. 【認知症その人が穏やかに生活できる支援】
カテゴリー

【認知症その人が穏やかに生活できる支援】とは、認知症高齢者の気持ちが安定し、平穏に生活できるような支援について理解した内容である。『認知症の人が安心できる環境づくり』『認知症の人が自信を取り戻す関わり』の2サブカテゴリーが抽出された。表7に示した。

『認知症の人が安心できる環境づくり』は15デー

表7. 【認知症その人が穏やかに生活できる支援】カテゴリー

サブカテゴリー	データ
認知症の人が 安心できる環境づくり	認知症の人へは安心できる環境を作る
	認知症の人との関わりは相手の立場になり理解することが大切
	認知症の人との関わりは笑顔と優しい眼差しが大切
	一人一人が理解しやすい言葉で接する
	相手の目を見て、対象に触れながら、明るい口調で話すことが大切
	ユマニチュードを大切にしたい関わり
	非言語的コミュニケーションを重視し、緊張を解く関わりが大切
	その人について知ることが大切
	徘徊には目的があり、声かけを工夫することが必要である
	認知症の人がどのような思いで話しているのか理解しようとする姿勢が大切
	その人の過去を知った上で接する
	認知症の人の言葉の中にヒントがあることがあるため傾聴することが大切
	新しい環境がストレスにならないよう配慮しなければならない
	認知症の人が、パーソンセンタードケアを感じられることが大切
パーソンセンタードケアを行うことは認知症の人を尊重した関わり	
認知症の人が自信を 取り戻す関わり	認知症の人が自信を取り戻す関わりが悪化予防につながる
	相手を否定せず接する
	学習療法は認知機能低下の予防につながる
	認知症の人のできないことをできるように検討することは、自信を持たせる関わりにつながる
	認知症に焦点を当てすぎず、症状を持つ人に注目する
	何度も話すことは自分が誇りに思っていることであったりするためしっかり聴く姿勢が大切
	認知症の人が同じ話を何度もすることを、聞いてあげることが必要
認知症の方は明るく、思いやりがあったことからその人の今までの生き方を理解できた	

タから構成されていた。具体例は「認知症の人がどのような思いで話しているのか理解しようとする姿勢が大切」があった。ユマニチュードやパーソンセンタードケアなど、認知症の高齢者が安心できる支援方法を学んでいた。『認知症の人が自信を取り戻す関わり』は8データから構成されていた。具体例は「相手を否定せず接する」があった。認知症に焦点を当てず、できるようにする方法の検討やその人の今までの生き方を知ることもその人を知ることに繋がると学んでいた。

7. 【元気の出る通所リハビリ】カテゴリー

【元気の出る通所リハビリ】とは、利用している高齢者にとって通所リハビリが、楽しみの場や機能訓練などを通して自立を促す生活につながり、さらに意欲など活性化につながっていると学んでいる内容である。『利用者の楽しみを大切にする支援』『利用者の自立した生活を促す支援』『利用者の選択に合わせた活用』『利用者の安全な送迎』『介護負担に目を向けた虐待予防』の5サブカテゴリーが抽出された。表8に示した。

『利用者の楽しみを大切にする支援』は5データから構成されていた。具体例は「通所リハビリ

が楽しみの場」があった。利用者同士が交流し、楽しむことができる工夫がされていたと学んでいた。『利用者の自立した生活を促す支援』は5データから構成されていた。具体例は「通所リハビリは自立した生活を送ることを目標にしていると感じた」があった。通所リハビリを通して日中の活動が促され意欲の向上につながっていたと理解していた。『利用者の選択に合わせた活用』は1データから構成されていた。具体例は「通所リハビリはその人の活用時間に合わせ選択の幅を広げられる」であった。『利用者の安全な送迎』は1データから構成されていた。具体例は「安全点検し送迎の高齢者を守る」であり、利用者の送迎時の安全対策についても学んでいた。『介護負担に目を向けた虐待予防』は1データから構成されていた。具体例は「虐待は、介護負担にも目を向け軽減できる支援が大切」であった。通所リハビリを利用することは介護者の介護負担の軽減につながっていることを学んでいた。

8. 【住み慣れた地域の中の老人保健施設】カテゴリー

【住み慣れた地域の中の老人保健施設】とは、

表8. 【元気の出る通所リハビリ】カテゴリー

サブカテゴリー	データ
利用者の楽しみを大切にする支援	通所リハビリは交流の場
	通所リハビリは全員が参加しやすい工夫がされていた
	皆が楽しめる工夫
	通所リハビリが楽しみの場
	通所リハビリで作製した作品は達成感や喜びにつながっている
利用者の自立した生活を促す支援	通所リハビリは自立した生活を送ることを目標にしていると感じた
	通所リハビリにより日中の活動が促され生活リズムが整う効果
	通所リハビリでのリハビリの効果を実感できる
	皆でリハビリを行うことで意欲が湧く
	自立を促す声掛けや支援
利用者の選択に合わせた活用	通所リハビリはその人の活用時間に合わせ選択の幅を広げられる
利用者の安全な送迎	安全点検し送迎の高齢者を守る
介護負担に目を向けた虐待予防	虐待は、介護負担にも目を向け軽減できる支援が大切

『行事や広報活動を通して地域と施設の繋がり強化』『地域との交流が高齢者の喜びにつながる』『地域に根差す施設づくり』の3サブカテゴリーが抽出された。表9に示した。

『行事や広報活動を通して地域と施設の繋がり強化』は6データから構成されていた。具体例は「老健から講演会，夏祭り等を開催し地域に知ってもらう活動」を行っていることを学んでいた。『地域との交流が高齢者の喜びにつながる』は3データから構成されていた。具体例は「地域ボランティアの受け入れは入所者にとり他者交流になる」を学んでいた。『地域に根差す施設づくり』は6データから構成されていた。具体例は「独居高齢者を民生委員と協力して巡回し，地域との交流を大切にしている」ことを学んでいた。

9. 【医療・介護の切れ目のない支援】カテゴリー
【医療・介護の切れ目のない支援】とは、医療

と介護の切れ目のない支援が，退院後の高齢者の生活や家族支援につながると学んでいる内容だった。『病院と施設の共通点』『病院と施設の相違点』『医療施設の退院支援の意義への気づき』『医療・介護の連携の大切さへの気づき』の4サブカテゴリーが抽出された。表10に示した。

『病院と施設の共通点』は1データから構成されていた。具体例は「自立を促し，その人らしさや本人が楽しいという気持ちを大切する関わりは病院も同じ」があった。『病院と施設の相違点』は3データから構成されていた。具体例は「病院とは違った観察の仕方がある」があった。日々の生活の中で，多職種で高齢者のいつもと違う変化の観察を通して情報共有していることを学んだ内容だった。『医療施設の退院支援の意義への気づき』は5データから構成されていた。具体例は「施設実習を通して，病棟の退院支援は重要であ

表9. 【住み慣れた地域の中の介護老人保健施設】カテゴリー

サブカテゴリー	データ
行事や広報活動を通して地域と施設のつながり強化	地域ボランティアの受け入れは，施設を知ってもらうことにつながる
	施設には安心して生活できる環境があることを伝えていた
	様々な制度や施設があるため本人・家族に合った方法を見つけ，悩んでいる人が減少してほしい
	老健から講演会，夏祭り等を開催し地域に知ってもらう活動
	施設見学や施設の役割を知ってもらうことは地域の社会資源を学ぶ機会
	施設を知ってもらう活動は，その人に合った施設を選べるようになるきっかけになる
	地域に施設があることを伝え，施設を理解してもらう活動している
	自宅・老健・病院をうまく回るような情報提供をしていかなければならない
地域との交流が高齢者の喜びにつながる	家族や地域に向かって広報誌を作成し発信
	地域とのつながりは入所者の喜びにつながる
	地域とのつながりは地域で生活している実感につながる
地域に根差す施設づくり	地域ボランティアの受け入れは入所者にとって他者交流になる
	施設は，地域など様々な人の支援で成り立っている
	要介護になっても地域で安心して暮らせる生活
	地域住民が高齢者に目配りを忘れない付き合いができる社会になる必要がある
	地域に必要な選ばれる施設にならなければならない
	独居高齢者を民生委員と協力して巡回し，地域との交流を大切にしている

表10. 【医療・介護の切れ目のない支援】 カテゴリー

サブカテゴリー	データ
病院と施設の共通点	自立を促し、その人らしさや本人が楽しいという気持ちを大切する関わりは病院も同じ
病院と施設の相違点	施設のステーションは病院と異なり高齢者が訪れやすい作りになっていた
	病院とは異なる高齢者の入浴方法
	病院とは違った観察の仕方がある
医療施設の退院支援の意義への気づき	施設実習を通して退院後の生活について深く考える機会になった
	老健に入所したい意向を確認することは、退院後の支援につながる
	患者の退院後の生活や家族の負担を理解し、患者・家族に合わせた支援が重要
	退院後の在宅での生活がイメージでき、退院後の生活を考慮した看護がしていきたい
	施設実習を通して、病棟の退院支援は重要であると感じた
医療・介護の連携の大切さへの気づき	医療・介護と切れ目のない支援が大切
	入院時から退院後の生活を見据えた医療、介護が求められる
	自宅・老健・病院をうまく回るような情報提供をしていかなければならない

る」があった。施設実習を通して退院後の生活や家族の負担を理解した支援が重要であることを学んでいた。『医療・介護の連携の大切さへの気づき』は3データから構成されていた。具体例は「入院時から退院後の生活を見据えた、医療・介護が求められる」があった。病院・施設実習を通して医療と介護の切れ目のない支援が、退院後の高齢者の生活や家族支援につながることを学んでいる内容だった。

IV. 考 察

今回、老年看護学実習における施設実習の学生の学びは、【施設の高齢者と職員を守る災害対策】【高齢者と家族のニーズを叶える支援】【高齢者の健康保持のための支援】【穏やかな死への支援】【穏やかな暮らしを支える】【認知症その人が穏やかに生活できる支援】【元気の出る通所リハビリ】【住み慣れた地域の中の老人保健施設】【医療・介護の切れ目のない支援】の9カテゴリーで構成された。3日間の短期間の実習ではあったが、通所リハビリ、施設入所の高齢者や施設職員との関わりを通して学ぶことができた内容であった。各カテゴリーから施設実習目標の到達

度を分析し学習効果を検証する。

1. 施設の目的・理念、機能、構造、事業概要、災害時の対応の理解について

この目標については【施設の高齢者と職員を守る災害対策の理解】が該当する。施設の高齢者を守るだけでなく、職員を守る災害対策や普段より地域と連携し災害対策が必要であることを学んでいた。大湾⁷⁾は、多くの被害と人命を奪った阪神・淡路大震災や東日本大震災は高齢者ケアや地域づくりに課題を提示し、日頃より災害にも応用できる地域づくりを構築しておくことが必要であると述べている。今回の学生の学びは、災害にも応用できる地域づくりの構築が大切であることも含めた内容だった。これは学生の実習記録を分析して教員が学びの広がりにつづかされた点であった。今後は施設における災害にも応用できる地域づくりについても考える機会を検討したい。

施設の目的・理念、機能、構造、事業概要については4月実習開始前に学内で講義を行っているため、今回の学びの内容としての記述はなかった。講義後学びの記載をさせ、理解度の確認や講義から学生がどのような学びをしていたか確認する必要がある。

2. 施設で療養生活を送る高齢者の健康面を身体、精神、社会的側面からの理解と施設における関連職種役割、協働・連携の理解について

この目標については、【高齢者と家族のニーズを叶える支援の理解】が該当する。【高齢者と家族のニーズを叶える支援の理解】は、高齢者と家族のニーズに沿ったケアプランを立案し、多職種で協働して支援していることを学んだ内容である。施設では高齢者と家族のニーズに沿ったケアプランを立案し、高齢者と家族のニーズを叶える支援を多職種で協働して行っていた。【高齢者と家族のニーズを叶える支援の理解】は、学生が受持ち利用者のケアプランの閲覧や、サービス担当者会議・判定会議への参加、介護支援専門員よりケアプランについて臨地講義を受けることで学んだ内容であった。ケアプランの閲覧は、利用者及び家族の健康面を身体、精神、社会的側面から理解することを助ける。利用者及び家族の生活に対する意向やニーズ、その目標がわかり、高齢者と家族が望んでいる生活を叶える支援方法を学ぶことにつながっていた。ケアプランはその人らしさを踏まえ、その人にあった計画・実施がされる。施設で療養生活を送る高齢者の身体、精神、社会的側面の変化が、その人らしく生活するための暮らしにどのように影響しているかがわかる。またその人らしさを踏まえ、その人にあったサービス内容をどの職種が担当し支援しているかを学ぶことができる。

関連職種役割、協働・連携については、ケアプランの閲覧やサービス担当者会議・判定会議への参加を通してその重要性を学んでいる。鷺見⁸⁾は、チームが十分に機能を発揮するためには互いに関わり合い、よく話し合う土壌が必要であり、利用者を中心に「何がその人らしい生き方」なのかを共有し、相互に支援の在り方を考えること、互いの専門領域を生かし、有機的に関わるための努力を惜しまないこと、求める情報は何かを相手に伝え、的確に必要な情報を得ることが重要であると述べている。学生は施設実習を通して、多職種で「何がその人らしい生き方」なのかを共

有し、多職種でかかわるためにはお互いの職種の役割を理解し、専門分野で関わりチームの専門性を発揮する大切さを学んでいる。施設実習での多職種の協働・連携についての学びは意義あるものであったと考える。

3. 施設における療養生活の場に必要な看護の理解について

この目標については、【高齢者の健康保持のための支援】【認知症その人が穏やかに生活できる支援】【穏やかな暮らしを支える支援】【穏やかな死への支援】【元気の出る通所リハビリ】の5カテゴリーが該当する。【高齢者の健康保持のための支援】は高齢者の健康保持を看護師だけでなく、多職種で支援していると学んだ内容であり、【元気の出る通所リハビリ】は通所リハビリを利用している高齢者にとって、楽しみや場や機能訓練などを通して自立を促す生活につながり、意欲など活性化につながっていると学んだ内容である。高齢者は加齢や老化の速度に個人差が大きく、一人で多くの疾患をもっていることが多い。そのため安定した療養生活を送るためには、多職種協働による高齢者への支援体制が求められ、高齢者にとって楽しみながら自立を促し、生き生きとした生活ができる環境づくりが重要であることを理解することにつながる。【高齢者の健康保持のための支援】は施設における高齢者の健康保持のため看護師だけでなく、多職種で支援していると学んだ内容である。千葉・原田ら⁹⁾の施設実習における学生の学びの報告においても、高齢者ケア施設における看護師の役割の理解カテゴリーが抽出され、高齢者の健康管理、健康管理に関する他職種との連携のサブカテゴリーを上げている。施設は病状が安定期にあり入院治療の必要はないが、看護、介護、リハビリを必要とする要介護状態の高齢者を対象に、慢性期医療と機能訓練によって在宅への復帰を目指す施設である¹⁰⁾。高齢者の健康管理は看護師が中心となるが、生活の場での健康管理のため多職種で高齢者の観察を行い、情報を共有することが重要である。【認知症その人が穏やかに生活できる支援の理解】は認知症の特徴を踏ま

えながら、認知症その人の尊厳が脅かされず、安心して穏やかに生活できる支援が重要である。臨地講義や実際に認知症の高齢者との関わりを通して学びを深めている。加藤・梶谷¹¹⁾は学生の施設での学びとして、認知症の進行予防のための環境調整や、生きがいつくりの重要性、認知症高齢者のペースに合わせた介入の必要性を挙げていたことを報告している。生活の場である施設だからこそ、学習できた視点であると考え。今後認知症高齢者が増加するため、施設実習は認知症高齢者が穏やかに生活できる支援を学ぶ場として有効であると考え。【穏やかな暮らしを支える支援】は、高齢者の精神状態が安定し、自分らしく暮らすことができるよう支援することである。また加藤・梶谷¹¹⁾は、学生の学びの“高齢者の楽しみや生きがいつくりの支援を高齢者のエンパワーメントを促進する援助”としてカテゴリー化し、高齢者の潜在能力や、可能性に気づき、尊重し引き出す関わりとしてまとめている。本学の学生の学びでは『おいしく食べられる食事への支援』『その人に合わせた対応』『楽しめる環境づくり』『尊厳を支える』などがサブカテゴリーに入った。高齢者の精神状態が安定し、自分らしく暮らすことができるよう支援することは、牽いては高齢者のもてる力を引き出し、尊重する支援にもつながると考える。【穏やかな死への支援】は施設で行っている看取り支援から学んだ内容であった。人にとって死は生活の延長線上にあるといえ、高齢者の看取りの場の選択肢として、病院、在宅に加え介護施設など生活施設での看取りが行われている¹²⁾。看取りの場の選択肢である施設における、看取り支援を学習できたことは、高齢者と家族が穏やかな死を迎えられるような支援の在り方や、死生観を深める一助になると考える。本施設実習では看取りの場に立ち会い、支援の実際を見学できていない。職員より話を聞き学んだ内容であったが、『高齢者・家族の希望を叶える看取り』『家族の心に寄り添う看取り』『死に向かう高齢者の家族への予期的指導』『普段と変わらない生活の中での看取り』『多職種で支えるその人らしい看取り』

の5サブカテゴリーを生成できた学びの内容は意義があったと考える。

4. 施設における家族や地域の関係者との協働・連携の理解について

この目標については、【住み慣れた地域の中の老人保健施設】【医療・介護の切れ目のない支援】の2カテゴリーが該当する。【住み慣れた地域の中の老人保健施設】は住み慣れた地域で継続した生活ができるように地域住民や地域のボランティアを取り込んだつながりを深め、相談の窓口や協働・連携が大切であると学んだ内容であった。【医療・介護の切れ目のない支援】は医療と介護の切れ目のない支援が、退院後の高齢者の生活や家族支援につながると学んだ内容だった。医療機関での治療が終わると、療養生活が始まる。要介護高齢者と家族が、療養生活を送る自宅や介護保険施設で介護保険のサービスを効率よく受けられるようにニーズをサービスにつなぐことが重要になる。また生活を分断されることなく住み慣れた地域で継続した生活ができるように、医療・介護の切れ目のない支援が求められる⁷⁾。学生は施設実習を通して医療施設での退院支援の重要性や退院後の生活を見越した支援の大切さに気づくことができていた。また住み慣れた地域で生活し、地域とのつながりをもつためには、地域に根差した施設であることも求められる。重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を促進していくためには、専門職の多職種の協働・連携だけでなく、地域にあるボランティアや地域住民を巻き込んだ協働・連携が必要になる。学生は行事や広報活動を通して地域と施設のつながり強化や地域に根差す施設づくりや地域との交流が重要となることを学んでいた。この学びは地域包括ケアシステムの構築を促進することである。本実習では、地域包括ケアシステムの構築の促進の視点と学生の学び内容をつなげる指導ができなかった。本調査をまとめて初めて気づいた視点であった。次年度の学

生の指導に役立てていきたい。

結 論

施設実習での学生の学びについて実習記録を通して分析した結果、施設実習を通して学生が捉えた学びの内容から211データを抽出し、37『サブカテゴリ』、9【カテゴリ】を生成した。

1. 施設の目的・理念、機能、構造、事業概要、災害時の対応の理解について

この目標については【施設の高齢者と職員を守る災害対策の理解】が該当する。施設の高齢者を守るだけでなく、職員を守る災害対策や普段より地域と連携し災害対策が必要であることについて学んでいた。施設の目的・理念、機能、構造、事業概要についての学びの記述はなく、今後検討が必要である。

2. 施設で療養生活を送る高齢者の健康面を身体、精神、社会的側面からの理解と施設における関連職種の役割、協働・連携の理解について

この目標については、【高齢者と家族のニーズを叶える支援の理解】が該当する。ケアプランの閲覧は、利用者及び家族の健康面を身体、精神、社会的側面から理解することを助ける。利用者及び家族の生活に対する意向やニーズ、その目標がわかり、高齢者と家族が望んでいる生活を叶える支援方法を学ぶことにつながる。

3. 施設における療養生活の場に必要看護の理解について

この目標については、【高齢者の健康保持のための支援】【認知症その人が穏やかに生活できる支援】【穏やかな暮らしを支える支援】【穏やかな死への支援】【元気の出る通所リハビリ】が該当する。安定した療養生活を送るためには、多職種協働による高齢者への支援体制が求められ、高齢者にとって楽しみながら自立を促し、生き生きとした生活ができる環境づくりが重要であることを理解することにつながる。また看取り支援を学習できたことは、高齢者と家族が穏やかな死を迎えられるような支援の在り方や、死生観を深める一助になる。

4. 施設における家族や地域の関係者との協働・連携の理解について

この目標については、【住み慣れた地域の中の老人保健施設】【医療・介護の切れ目のない支援】の2カテゴリが該当する。地域と施設のつながり強化や地域に根差す施設づくりや地域との交流が重要となることを学んでおり、地域包括ケアシステムの構築の促進につなげる指導が求められる。

謝 辞

本看護学科に施設実習の機会を提供いただき多くの学びをいただくことができました利用者とそのご家族の皆様、ご指導いただきましたA施設の職員の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省:厚生労働省における高齢者施策について
www.moj.go.jp/content/000123298.pdf ,
アクセス日2019.1.7
- 2) 厚生省高齢者ケアサービス体制整備検討委員会(1998):介護支援専門員標準テキスト第2巻.財団法人長寿社会開発センター, 166-183,
財団法人 長寿社会開発センター, 東京.
- 3) 古田美奈子(2000):介護老人保健施設での高齢者看護, 柿川房子, 金井和子(編), 新時代に求められる老年看護, 317-322, 日総研, 名古屋.
- 4) 千葉真弓・原田美香・細田江美, 他2名(2008):介護老年保健施設での老年看護実習における学生の学び, 長野県看護大学紀要, 10, 21-32.
- 5) 加藤真紀, 梶谷みゆき(2006):老年看護施設実習における学生の学びと指導上の課題の検討, 島根県立看護短期大学紀要, 12, 79-90.
- 6) 谷津裕子(2015):Start UP 質的看護研究, 67-72, 学研メヂカル秀潤社, 東京.
- 7) 加藤真紀・梶谷みゆき(2006):老年看護施設実習における学生の学びと指導上の課題の検

- 討,島根県立看護短期大学紀要, 12, 79-90.
- 8) 大湾明美 (2016): 事例にみる高齢者が生かされ生かされる地域づくり, 正木治恵・真田弘美 (編), 看護学テキスト老年看護学概論 改訂第2版「老いを生きる」を支えることとは, 346-356, 南江堂, 東京.
- 9) 鷺見よしみ: 他職種連携・地域連携, 厚生労働省ホームページ, <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000114473.pdf#search=%27%E5%A4%9A%E8%81%B7%E7%A8%AE%E9%80%A3%E6%90%BA%E3%81%A8%E3%81%AF%27>, アクセス日 2019. 1. 29
- 10) 厚生労働統計協会 (2016) : 厚生指標 増刊 国民福祉と介護の動向2016/2017, 163 (10), 153-160.
- 11) 内田富美江 (2008): 介護福祉養成教育における死と看取り教育の必要性, 川崎医療短期大学紀要, 28, 53-58.